Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-24

『石川道子著作集 近世西摂津の都市と農村』（時評・書評・展示評）

八木，滋

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,9:123-129

(Issue Date)
2017-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010065

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010065

Current Topics & Reviews

時評・書評・展示評

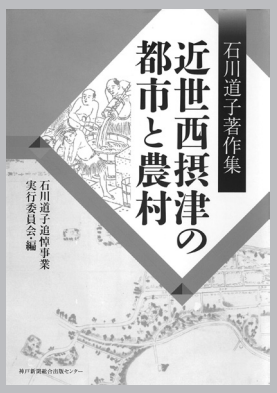
『石川道子著作集 近世西摂津の都市と農村』

八木　滋

本書は、二〇一四年二月二四日に亡くなられた石川道子氏の主な著作を集めた遺稿集である。本書に収録された石川氏の「主要著作目録」を見ると、その仕事量に圧倒される。その作品群の中から、短期間のうちにこのような形の著作集を編集・発行された、大国正美氏をはじめとする石川道子追悼事業実行委員会の方々に、まず最初に敬意を表したい。

本書については、すでに本誌前号で木村修二氏による紹介がある。（本書の目次などは木村氏の紹介に載せられているので、本稿では割愛する。）また、収められた論文・エッセイについては、本書に収録されている岩城卓二氏の「解題」で的確なコメントが付されている。したがって、「西摂津の都市と農村」についての研究状況に精通していない私が書評しても、その屋上屋を架すだけになってしまいそうである。しかし、追悼事業実行委員会などで何等のお手伝いもできなかった身としては、拙い書評ではあるが、石川氏の仕事の意義を改めて伝えることで、多少なりともその責めを塞ぎたいと思う。

本書は、本文だけでも五〇〇頁にも及ぶ大著である。Ⅰ（西摂津の領主支配）・Ⅱ（西摂津の都市と農村）・Ⅲ（史料としての古川柳）の三編に分けられている。ⅠとⅡに分けられているが、地域社会論という点で内容的にはひとまとまりのものと考えていいだろう。Ⅲは、少しⅠ・Ⅱとは趣を異にしている。岩城氏の「解題」では、Ⅱをいくつかのグループに分けられている。Ⅰの領主支配も含めると、①所領支配、②伊



石川道子追悼事業実行委員会編
『近世西摂津の都市と農村』

神戸新聞総合出版センター
2016年2月
A5判　545頁
税込2,700円

丹郷町と酒造、③村と外来者、④中山寺と参詣者、⑤飛脚、となる。

石川氏の研究は、Ⅰ・Ⅱのどの論考も基礎研究として、丁寧な実証と叙述に貫かれている。また、取り上げるテーマや論点も、岩城氏が「解題」で指摘しているように、石川氏の「勘所は抜群に優れていた」。以下、すべての論考には言及できないが、主だった論考について、順を追ってコメントしていくことにする。

＊　＊　＊

①の所領配置の研究は、地域社会の構造を考える上で、基礎的な研究であるが、実際に実証的に検討するとなると、史料の残存状況により骨の折れる仕事になる。大坂周辺（さしあたり摂河泉）では、所領が分散錯綜し、その時期的な変遷（領主の交代）もある。史料の残存状況や実証レベルにより、地域（あるいは領主）によって研究状況に精粗があろう。「解題」でも紹介されているが、石川氏は、自治体史ではその自治体に限定された記述になっていて、領主全体の所領配置がわからない、との不満を持っていた。これもすでに指摘されているが、所領配置の問題を幕府の大名・旗本支配や政策論という上からの視点だけではなく、大庄屋や地域支配の構造、あるいはそれがどのように地域社会に影響を与えたのかという下からの視点が重要なのではないだろうか。近年、所領支配や陣屋あるいは在地代官や大庄屋についての研究は、各所で進展してきている。石川氏の研究も、それらの研究の中に位置づけていく必要があろう。

⑤の「西摂の三度飛脚」も、三度飛脚の実際の業務形態の一端を明らかにした貴重な研究だが、旗本岡野氏の上方知行所（飛び地領）経営を通信の側面から明らかにしているという点で、①の研究としても位置付けられる。史料から問題を発見し、それをさまざまな分野に結び付けながら明らかにしていく石川氏の研究スタイルが現れた好論と言えるだろう。

②の「在郷町の火消しの存在形態」は、伊丹郷町の火消し組織を丹念にたどっている。言うまでもなく、都市の存続において火消し組織は重要な位置を占める。例えば大坂の場合でも、複雑な制度変更があり、また火消組合（町）は幕府への訴願組織になるなど他の組合町組織に比べて都市社会の中で重要な位置にあった。この論考でも、制度の変遷が丁寧にたどられ、その意義づけも的確になされている。

酒造を扱った「江戸積み酒造家・小西家と出店の創設期」は、伊丹の酒造家小西家の来歴を丁寧にたどっている。とくに、伝法店・安治川店や江戸店について多くの頁を割いていることは特筆される。近世の大坂は俗に「天下の台所」と呼ばれるが、商品流通の実態に迫った研究はさほど多くはない。伝法や安治川口の廻船問屋の研究はほとんどなく、大坂研究においても貴重な素材を提供している。江戸店についての研究も興味深い。江戸の出店や全国的に事業展開する商人の研究は、かつて盛んにおこなわれていたように思う。近年でも、まだ研究成果は出ていないが、このような商人に改めて注目が集まっている。これもまた、その一事例の研究として貴重であろう。

「元禄・幕末の清酒『白雪』の復刻」は、石川氏ならではの作品の一つである。生産・流通の分野でも、それがどのように生産され、具体的にどのようにして運ばれ消費されているのか、あまり理解せずに論文を書いている場合も多い。酒を研究していて、どんな酒がつくられているのか、知りたいと思うのは当然のことである。しかし、条件が整っていたと言えばそれまでだが、それを実際に酒造会社の（技術）社員の方と古文書を読みながら再現する人はいないだろう。文中に「博物館では全く取り上げられず」とあるが、石川氏のこの仕事はある意味「博物館」的な仕事とはいえまいか。博物館＝展示がすべてではないが、他の施設との差異を考えれば、展示がその中心にあることは否定できない。展示というのは、見せるという行為である。単に資料を並べているだけの場合も往々にしてあるが、見せるための工夫もする。再現の映像を制作するなど、いろいろな手法を使う場合もある。小西家文書の研究を進めていくうちに古酒の復刻を思いつくというのは、そういった観点から「博物館」的な発想と言えるのではないだろうか。

以前、私は白雪の復刻を買い求めて飲んだことがあるが、まさに「香りは芳醇濃厚、味は大変甘」かった。日本酒＝伝統的な味、と漠然と考えていたが、江戸時代の人が飲んでいた酒は現在飲んでいる酒とは全く違った。消費者のニーズに合わせて、時代とともに味も変わっているという事実は、われわれの歴史を見る目を澄んだものにしてくれるだろう。酒造会社が消費者のニーズに合わせて改良を加えてきたことと、研究機関が地域還元についてもっと意識しなければならないという石川氏の主張は、漫然と仕事をするなという意味で、同じことを言いたかったのではないだろうか。ただし、

研究機関（博物館）の地域還元を考える場合は、酒造業と違って観覧者を増やすために観覧者の受けの良い史料ばかり展示することとは違うのではないか、という点だけは記しておきたい。

「尼崎城下の江戸積み酒造業」もまた石川氏ならではの好論である。酒造の摂泉十二郷のうちなじみが薄く史料も少ない尼崎の酒造業をテーマにしたものである。尼崎の酒造についてのまとまった史料はのこされていないようだが、宝塚市の和田正宣氏所蔵文書（同文書については、本書五三一頁を参照されたい）の中にのこされていた「酒株書上げ帳」のほか、種々の史料群から史料を博捜した成果である。西摂津に関わる史料に精通した石川氏ならではの成果である。私も史料ネットの活動で和田家文書の整理に参加し、「宝塚の古文書を読む会」の立ち上げにもかかわった。しかし、和田家文書を使って研究を試みようとしたことはあったが、力及ばすに果たせなかった。このような石川氏の論稿に接すると、地域に根付いた研究の大切さについて、改めて考えさせられる。

「近世江戸積み酒造業と原料米の流通」も、西摂津だけでなく、北摂津もフィールドにしていた石川氏ならではの作品である。酒造米の流通は、流通史のうえからも興味深いが、地域と地域（商人と商人）のつながりや領主との関係を示す重要な素材といえよう。内容には立ち入らないが、以前私も北摂津の酒造米について調べたことがあるので、その意味でも感慨深かった。

③の「京都明暗寺の虚無僧と村々のかかわり」では、明暗寺の本末関係から丁寧に論じている。このスタイルは、他の論考でも同じである。基本的な事項から事実を丁寧に確認しながら論を進めている。

虚無僧は、幕府から「御入国之砌被仰渡候御掟書」を根拠に勧進権を保障されていた。しかし、専横な振る舞いや偽の虚無僧が出没するなどしたため規制も受けることになった。このように虚無僧と村々との間で頻繁に摩擦がおこるようになり、取締場さらに留場の制度ができる。取締場は、寺が取締り人を任命し、村に出入りする虚無僧を管理させる、というものである。留場は、村から明暗寺に一定の留場料を支払う代わりに、明暗寺はその村には一切虚無僧を立ち入らせないというものである。この処理の仕方は、近世身分社会の中にあって、特権を持つ者がその特権を侵すような「自由」な行為を止めることができない趨勢になり、権益を侵食するよ

うな行為を実質的に認める代わりに特権を根拠に一定の対価（金銭）を支払わせて処理するというものである。このような処理の方法は、いろいろな集団でも見られた。本書「宿駅と在村の旅宿」で示されている、中山寺門前（中山寺村）の旅宿とその周辺の宿駅との争論において、中山寺門前の旅宿が周辺の宿駅に金銭を支払って、その存在を認めてもらうということも、同種の行為といえよう。特権が実際の社会関係の上では崩壊していても、特権が存在する限りそれを認められている者は、その利得を得ることができるということである。しかし、虚無僧の場合は、その特権が江戸時代の内（弘化四年）に崩壊してしまった。石川氏はこれについて「もっともこれ以降も本則（宗門の僧であることを証明する書類）の発行や留場の制度、また廻在修行は表面的には変わることなく続けられており」としている。本来なら、特権が否定されれば、村から完全に排除されてしかるべきである。この矛盾はどう説明されるのであろうか。この論文の冒頭で、「廻在者に対する排除も、彼らを完全に締め出してしまうというのではなくて、習慣としても好悪の感情とは別に、その存在をそれなりに認識し、そのうえで村の経済的、精神的な許容範囲を越えた者に対しては、これを取り締まるというものではないだろうか」と述べている。しかし、特権が否定されれば、虚無僧は他の諸廻在者と区別されることになるのではないか。たしかに、表4・表5を見ると弘化四年以降でも、村から虚無僧に金銭が支払われていることは確かなようである。ならば、諸廻在者と虚無僧の動向を峻別しながら、村と虚無僧との関係について時期を追って丁寧に整理して示すべきではなかったか。そのうえで、弘化四年以降でも虚無僧と諸廻在者への村の対応に差異がないとすれば、それが何故なのか、ということを考察する必要があろう。村側に外来者への寛容さがあるということは確かだろうが、一方で弘化四年以降も虚無僧が廻在しており、事実としてはそれに対して依然として村側が対応しなければならない状況にあったということだろう。弘化四年の触れの評価にもつながる問題である。

④の「近世前期の中山寺と中山寺村」と「中山寺の参詣者と寄進銀の推移」は、中山寺とその門前にある中山寺村についての論考である。一読した印象は、隔靴掻痒の感が拭えなかった。中山寺の寺院の内部組織と中山寺村の基本的な性格について、いまひとつイメージがつかめなかった。しかし、それはこの論考が逆に充実しているからかもしれない。むし

ろ、文禄・延宝・宝暦検地帳から近世前期の中山寺と中山寺村についてでき得る限り明らかにした、あるいは「中山寺寄進帳」から一八世紀初頭頃の中山寺の参詣者や寺の運営について明らかにした力作と評価する方が妥当だろう。数少ない史料から数多くの事実を丹念に明らかにしており、古文書研究の醍醐味を味わえる作品である。

中山寺は、中山寺の各坊舎と寺の下人的な百姓が地主となっている。中山寺村は幕府領であり、中山寺の寺領ではない。山林も含めて幕府から朱印地は認められなかったようである。そもそも中山寺村はどのようにしてできたのであろうか。実証は難しいかもしれないが、いろいろな可能性を想定しておく必要があるのではないだろうか。このように中山寺と中山寺村との関係は、まだもう少し整理が必要なのではないかと思われる。近世後期の中山寺の組織や構造からさかのぼって考えることも必要であろう。

和泉の槇尾山施福寺（中山寺と同じく西国三十三か所）や松尾寺について、その周辺地域との関係も含めての研究が近年進んでいる（『和泉市の歴史』：第一巻『横山と槇尾山の歴史』、同第二巻『松尾谷の歴史と松尾寺』和泉市教育委員会）。槇尾山と松尾寺でもその内部構造や地域との関係は異なっているが、中山寺との比較対象になるのではないだろうか。また、単に対象としての比較だけでなく、分析の視点や手法についても参考になる点があるのではないだろうか。

Ⅱの古川柳の研究については、なかなか論評することは難しい。古川柳のことはよくわからないが、私も歌舞伎や文楽あるいは落語などを楽しむことはある。歌舞伎や文楽を純粋に楽しむということを大事に思っているが、江戸時代の社会の雰囲気を味わったり、研究テーマに関係するようなことはないかと考えながら鑑賞することはある。古川柳を通して、古文書だけではわからない庶民の意識や感情をすくい取ろうという試みであろう。逆に、「句解と初心者雑感」では、古川柳の解釈にも歴史学的な手法や知見が必要だと主張されているように思う。冒頭の少し辛辣な句解への評価は、その言う意味だと理解している。

その中で、少し毛色が違うのが「虫退治」である。文章は、戯文の史料紹介とパロディーに終始している感はある。もちろんパロディーの部分は出色の出来である。もともとの作者の池上五兵衛の戯文がよく出来ているということもあるだろう。そういう意味では、これも「博物館」的な作品と言える

かもしれない。では、なぜ石川氏はこの史料に注目できたのであろうか。史料を利用する際、文書群のなかの当面必要なものだけを取り出して利用する場合が多い。そのような史料の利用ではこのようなパロディーは生まれなかったであろう。池上家文書を整理され、おそらくすべての文書を読み、池上家の人びとのことを誰よりも「知る」石川氏だからこそ、この戯文に注目し、このパロディーを思いついたのではないだろうか。古文書一点一点を疎かにしてはならないことを今一度教えられた気がする。

＊　＊　＊

本書の「あとがき」で、大国氏は本書の編集にあたって「石川さんの問題意識は鋭く、また学界にも広く知ってほしいとの願いを込め、論文集を主体にすることにした」と述べている。本書を読んで、私もそう思った。どの論考も、いろいろな意味で参考になった。直接対象として関連するもの、テーマや対象が同じような社会的位相で比較可能なもの、分析手法が参考になるもの、などレベルではさまざまである。とくに大坂周辺（摂河泉など）の地域社会を研究する者にとって、本書は必読であろう。それぞれのフィールドで地域史研究が深められているが、それが交流する機会は意外と少ないのかもしれない。自治体史を超えて地域史研究の交流する場やそれに基づいた成果の集約・総括といったものが必要だと感じた。その点で、石川さんの論考が埋もれることなく、このような形で集成され出版されたことを改めて喜びたいと思う。

石川さんは、専門的な歴史学の教育を受けてはいないが、古文書に親しみ、古文書に基づいて、地域の歴史を明らかにしてきた。それは、古文書から真摯に過去に生きた人びとの声（喜びも悲しみも含めて）を聞き、それを客観的に叙述しようとしていたからだろう。

そうした気持ちが、古川柳などへの関心にも向かわせたのではないだろうか。過去に生きた人びとのさまざまな営みの上に、われわれが生き暮らしているということを今一度思い出して、歴史の研究を続けたいと思う。

石川さんが市井の歴史家として稀有な存在だと思うが、個性は違っていても、石川さんと同じような市井の歴史家がまた幾人も出てきてほしいと思う。